ささやかな花

ささやかな花

登場人物

優風（ゆうか）
恵子
俺

俺がいる。恵子と優風が来る。

俺　恵子が独り言のように、窓ガラスにもたれかかって呟いた。
恵子「ひまわり、咲かなかったね」
俺　外は雨降り、
優風　秋の長雨。しとしと。
恵子　テレビでは国際問題についてコメンテーターが神妙な顔つきで話している。
優風「来年は今年よりも早く種を蒔けばいいんだよ」
恵子　と、優風が言った。
俺「まるで大人みたいなこと言うんだな」
優風「お父さんみたいに子どもじゃないもん」
俺　そういっていたずらっぽく笑った優風を
恵子　かわいらしいと思うのは、
俺　おそらく
恵子　親ばかというのだろう。

俺　俺はうつ病で退院したばかりだった。十階建てのマンションから
飛び降りようとしたが怖くなって飛ぶことができなかった。
今でも足元に広がる景色を鮮明に覚えている。
恵子「コスモスも、この前のすごい雨で全然ダメになっちゃったね」
俺　自殺を考えたのは生きていること自体がつらかったからだ。
恵子　会社に行けば上司に怒鳴られてばかりだったし、
俺　仕事もできなかった。
優風　残業続きで家族の時間が持てなかった。
俺　１０代の頃持っていた夢は世間知らずだったけれども、
優風　それでも希望に満ちていて、
恵子　でも今は特にやりたいことも見つけられず、
俺　３９歳になってしまった。

優風「そもそもお母さんみたいなめんどくさがりな性格の人が、
花を育てるなんてムリなんだよ」
俺　誰に似たのか優風は口が達者で困る。
恵子「だからひまわりとコスモスにしたんじゃない。土が悪かったのかもね。
来年は土も入れ替えないとダメだろうな」
俺「それ、誰がやるの？」
恵子＆優風「それは」
俺　と、ふたりの視線が俺に
恵子＆優風　向けられた。
俺「はいはい、そうですか、わかりましたよ。私がやります」
そうは言ったものの
恵子　来年の初夏のことなど、
優風　先のことすぎて考えられなかった。
俺「また病気がぶり返して入院してなきゃいいけれど」
そう言うと恵子が語気を強めてこう言った。
恵子「そういうことは現実になってしまうから口にしたらいけない。
病気はもう治ったの」
優風「そうだよ、お父さんはもう大丈夫」

俺　俺は言葉を返せない。もう大丈夫だと言って恵子と優風を安心させたい
という気持ちと、本当はまだ精神的に不安定だと正直に話したい気持ちが
葛藤を生み出した。
恵子「でも先の話すぎるかもだね。今日とか明日をどう楽しく過ごせばいいか
考えるだけで精一杯だよね。てゆうか、それが正しい生き方なんだろうし」
俺　俺の葛藤を察したのか恵子が言った。
優風　テレビでは
恵子　人気のお笑い芸人が出演している
俺　カップラーメンのＣＭ。
優風「これからどこに行く？」
恵子「お昼、外で食べようか？」
優風「それ、お母さんがご飯作るのめんどくさいだけじゃない？」
恵子「バレたか」
俺　ふたりの漫才のようなテンポの良いやりとりを聞いているだけでよかった。
優風「お父さんは何を食べたい？」
俺「そば」
恵子＆優風「またぁ？」

俺　恵子と優風が口を揃えて嫌そうに言ったので、思わず笑ってしまう。
俺の笑い声を聞いて、ふたりも笑った。
優風「訊いたわたしがいけなかった」
恵子「じゃあ、種買いに行こう」
優風「はぁ？」
恵子「だから、これからでも間に合う何かの花の種を買いに行くんだよ」
優風「わたしはお寿司が食べたい」
恵子「うちにそんなお金はありません」
俺「すまんね、ダメ亭主で」
優風　今日は笑いが絶えなかった。
俺　こういうささやかな時間が幸せというものなのだろう。
俺の心にあった種は、
恵子　毒々しい赤と闇よりも深い
優風　黒の花を咲かせた。
俺　見たのだ、屋上の淵から真下をのぞいた時、一面にそれが咲いているのを。
優風「じゃあ、しょうがないからそばにしようか」
恵子「しょうがないって言うな」
俺　その花は枯れて、それでも種を残して死んだ。
恵子　またいつ発芽するかわからない。
俺　だけれども、自分が持っているのは、
優風　そんな種だけではない
俺　と、いうことだ。
恵子　救われる。
優風　それは穏やかに咲く
俺　ささやかな花。

優風「じゃあ、さっそく出かけようよ」
恵子「その前に掃除機かけるから、優風手伝って」
優風「えー、めんどくさい」
俺　雨はまだ降っていた。
優風　テレビは天気予報。
恵子「正午過ぎから全県で晴れるでしょう」
俺　と、アナウンサーが話している。

音楽。
恵子と優風、踊る。それを見て、俺も踊る。

優風　学校で初めて笑った。入学してようやく。クラスメイトが子どもに見えて、
笑っている場合じゃなかったの。つまらなかった、授業が。わたしの机には青春って
先輩が彫った痕跡があってダサい。夢の中で幸楽苑のラーメンを食べて、飲み干した
スープの底に見えたのは《ハズレ》の3文字。正夢だと思ったら、授業中で、
居眠りがバレて先生に注意された。「すいませーん」と適当に答えたら、なぜか
教室が爆笑。爆発したんじゃないかってくらい。それでもわたしはつられては笑わな
かったの。漠然としていたし、笑いのセンスは悪くない方だと自負していたから、
安易には笑顔になれないよね。注目を浴びることにも慣れないし。トム・ブラウンの
漫才が見たいなーって漠然と。そしたら、「だめー」って隣のカツラくんが寝起きの
私にツッコんだから、笑っちゃった。教室中、スベっていたけれど、ひとりでウケた。
青春。

恵子《流行歌なんて絶対に聴かないね》というスタンスのわたし。娘が好んで見ている
音楽番組は苦痛で。歌っている姿が芝居がかっているから嫌い。娘には言わない
けれど。それは94年の小室ファミリーとミスチルの悪夢のような売れっ子ぶりに、
うんざりしたからで。わたしが商業音楽誌のイチ編集部員だったことは、黒歴史。
今までそれを隠して生きてきた。成功のために演奏しているのではなく、音楽を
鳴らさずにはいられない人たちの絶対的な支持者だから。一度でも商業音楽に
魂を売ったことが恥ずかしく、後悔。しかしながらＹＯＡＳＯＢＩにはまんまと
ヤラレて。まわりは彼らを媒体にして金儲けをと思っているのだろうけれど、
当人のふたりは純粋に音楽をやりたくて歌い、演奏しているのだろうと勝手に
言い訳を。聴けば聴くほど、ずぶずぶふと。悔しいけれど大好きです。そして、
ＹＯＡＳＯＢＩを教えてくれた娘に感謝。音楽を好きになってくれてありがとう。

俺　兎に角、わたしの魂の帰る場所はない。魂などというものは、もともとないのかもし
れない。あるのは、《魂》という言葉だけ。だとしたら、私は何？あなたは誰？
わたしは今、迷宮の入口に立っている。迷宮と言うと洋風な感じが、わたしはしてい
たが、この迷宮は純和風である。《風》（ふう）、ではなく、純然たる和。仁王像が
わたしを見下している。わたしがその先へ進めないでいるのは、決して仁王像が恐ろ
しいわけではないのだ。単純に、《その先》が恐ろしい。それでわたしはやはり戻る
ことにした。が、振り向けばそこも迷宮の入口。そうだ、わたしには帰る場所が
なかった。人生は迷宮だった！わたしは途方に暮れた。座り込む事も忘れて立ち尽く
した。恐れ、でも逃げ出しもできずに、思考を尽くし、戦うことを。そしてついに
力果てた。意識を取り戻したとき、わたしは白い部屋にいた。

恵子「おかえり」

俺　と誰かが言った。それは、あなただった。わたしの帰る場所。

優風

今、長編小説を書いているんだけど、すでに面白くない。まだ原稿用紙４００字詰め１５枚くらいしか書いてないのに。自分の読書量の少なさが原因かと思われる。そう思って本を読もうと思うんだけれど世の中には本がありすぎて何から読んだらいいのかわからない。芥川龍之介から読めばいいのか。村上春樹から読んだらいいのか。とりあえずおととい観た映画「腑抜けども、愛の悲しみを見せろ」から読んでみるか。自分の実力のなさに気が付いて良かったのかな。知らないままで突き進んで書いた方がいいものが書けるかもしれなかったのに。去年までは根拠のない自信があった。でも今はもうない。そんな自分でいいのか？そんな自分でいいのか？どうしたら自信を持てるのか知りたい。

恵子

「未来は僕らの手の中！」ってブルーハーツが。って、３０年以上前の歌じゃん。詳しくあの年をググろうかと思ったが、時間が怖くてそれどころじゃない。王手されたみたいに、にっちもさっちも。わかったのは《時間は私の手の中にない》ってこと。だったら神様のもの？時間に縛られようとも、家族と過ごせるならば。不自由だから自由だよって、歌ってたのはブルーハーツじゃなかったけ？拝啓、忌野清志郎様。あの日はそれまでなんだか幸せな気分で、つまり、酔っ払って、松本から長野へ向かう電車に乗ったんです。そこで、ふいに見たケータイのニュースであなたの訃報を知りました。呆然としてしまいました。酔いが覚めました。そして、怒りが湧いてきたんです。早すぎます、逝くのが。ばかやろーと小さな声で叫びました。それからしばらくあなたのことを考えていました。ずっと、しばらく、ずっと。今日、電車で長野駅に着いて、家まで帰る道、自転車をこぎながら、あなたのつくった歌を口ずさんだんです。本当にいい曲だなあと思いました。あなたの声を聴きたかったですよ。またあなたがステージを駆ける姿が見られると思っていましたよ。なのにさー、本当に、なんていうかさー、脱力しちゃったんです。なんだか、もう、何事もどうでもよくなっちゃって。いまだに悲しい。１０年以上経ったのに。あー、もういやんなります。ねえ、もう一度歌ってください。目の前に現れて。

俺

自分がどうなりたいのかは、わかっている。ささやかなことに幸せを感じられる人になりたい。でもそれだけじゃ満足できないんだな。欲張りなんだ。それが僕を苦しめてる。それが僕を苦しめてる。自分で自分の首を絞めているんだな……。僕はやっぱり平凡がいいので、僕が思うなりの平凡な人を演じて生きています。だけれど、それはとても自分に負担がかかります。心のストレスになります。みなさんはどうなんでしょうか。本当の自分じゃない自分を演じて生きているのかな。それはやっぱり疲れるかな。一度、みんなで疲れたね、といってやめればいいのになあ。

でも、きっとそこでも、本当の自分をさらけだす自分を演じるのかもしれない。
いつまでたっても、結局自分に対して自分は演技しているのかもしれないね。たぶん、演技しないとはみ出しちゃうからだ。正常の枠からはみ出しちゃうってこと。正常の枠からはみ出したら、異常者だよ。警察に捕まったり、変人扱いされたりする。でも僕は思うんだ。それが自分らしいんじゃないかって。正常も異常もないんじゃないかな。うん、きっと、そうだ。でも人に迷惑はかけたくないな。人に笑われて生きたいな。そういうものに私はなりたい。

恵子　拝啓、神様。憎しみが止まりません。戦争が終わりません。なのにまだ祈り続けなくてはいけないのデスカ？竹原ピストルさんも歌っているけれど、我々は気がついているんです。あなたはいないんだって。神様なんて幻だって。だから私は音楽を信じます。家族を愛します。多分、そこにはあなたを信じる強さがあると思うんです！矛盾するかもですが、世の中にはそんなコトばかりで、それはナゼかというと神様、あなたの存在が矛盾しているからだよ。て、タメ口ですみません。私たちに必要なのは信じる強さ。そうです、それこそが必要なので。私は弱いから、まずはせめて自分を信じることからはじめます。そのための音楽、そのための家族。気づかせてくれてありがとう。どうか風邪などひきませんように。

優風　書くことないや。寝てばかりだったから。いろんな事考えた。将来のこととか、ダイエットのこととか、今読んでいる本のこととか、これから書く小説のこととか。こととか、こととか。一歩も前に進んでおらん。いかんな、まず一歩踏み出さねば。

恵子　花火を見る。
俺　田んぼの真ん中で。
優風　ドカンという爆発音が腹に響いて気持ちよかった。
恵子　花火は一瞬で散ってしまって儚い。
俺　人生も花火と一緒であっという間に散ってしまう。
優風　今、という一瞬を大切に生きねばなと思う。
恵子　そしてできれば見事な花火のように
俺　充実した一瞬にしたい。

（了）

原作　なかがわよしの
戯曲化　黒岩力也

※ｗｅｂブログ「なかがわよしのは、ここにいます。」から、掌編小説やつぶやきの文章を再構成して戯曲化しました。